母娘関係における透明性錯覚 [1) 2)]

武田美亜

〔キーワード〕母娘関係，行為者の透明性錯覚，観察者の透明性錯覚，信頼感，きょうだい

問　題

対人関係を円滑なものにするためには，他者の心的経験を把握しながらコミュニケーションを進める必要がある。他者はどのようなことを考えているのか，他者の発言に込められているのは本心かどうか，こちらが嘘をついていることを他者は気づいているかどうか，表情や婉曲な言い回しで伝えたつもりのメッセージを他者はきちんと察してくれたかどうかなど，他者の心的経験を適切に把握できないと，ミス・コミュニケーションが生じ，悪くすれば対人関係の悪化をもたらす（e.g., 岡本 , 2011; Gilovich, Kruger, & Savitsky, 1999）。

他者の心に直接触れることはできないため，人は最も利用しやすい自分の心を手がかりにして他者の心的経験を推測する。この方略はおおむね成功するが，しばしば自己中心性バイアスの影響を受ける。人は自己の視点（世界の認識のしかた）を基点とし，そこから調整して他者の視点を取ろうとするが，その調整は不十分なものとなりやすく，自分の知っていることは他者も知っている，他者も自分と同じように物事を認識しているというバイアスのかかった推測をしてしまう（Epley, Keysar, Van Boven, & Gilovich, 2004; Nickerson, 1999）。本研究ではこうした自己中心性バイアスの 1 つである透明性錯覚に焦点を当てる。

2 種類の透明性錯覚

透明性錯覚は，コミュニケーションに関わる者の 2 つの立場に対応して 2 種類ある [3)]。1 つは行為者の透明性錯覚である。自分のふるまいの意味や思考，感情など，そのままでは外部からうかがい知ることのできない心的経験が他者に知られている程度を過大推定する傾向のことであり（Gilovich et al., 1998; Vorauer & Ross, 1999），他者に心を見透かされているという錯覚である。もう 1 つは観察者の透明性錯覚である。これは行為者の心を知ろうとしている観察者が，自分は行為者の心的経験を正しく認識していると過大推定する傾向のことであり，他者の心を見透かしているという錯覚である（鎌田・堀・伊藤・吉野 , 1999; 武田・沼崎 , 2007a）。

透明性錯覚の研究方法例は以下の通りである。武田・沼崎（2007b）は，2 人の実験参加者のうち 1 人を行為者，もう 1 人を観察者として，お互いの姿が見えないように着席させた。行為者には 12 種類の製品（自動車，ピアス，スニーカーなど）の写真を提示し，各製品について 6 つの選択肢の中から好みのものを選ばせた。その後，行為者の好み（選択した製品）を観察者に予想させていることを告げ，各製品について観察者が行為者の好みを当てられるかどうか，

すなわち観察者に自分の好みを見透かされると思うかどうかを，「思う」「思わない」の 2 択で推測させた。観察者には，行為者に提示したものと同じ製品の写真を提示し，行為者がどれを選んでいると思うかを予想させた。その後，自分の予想が当たっているかどうか，すなわち自分は行為者の好みを見透かすことができていると思うかどうかを「思う」「思わない」の 2 択で推測させた。その後，観察者が実際に行為者の選択（すなわち製品の好み）を当てた数を確認し，これを実際値とした。また，行為者と観察者がそれぞれ「思う」と推測した数を数え，これらをそれぞれ行為者推測値，観察者推測値とした。推測値が実際値よりも大きい場合に，透明性錯覚が生じているとみなす。実際値と推測値の差が大きいほど，透明性錯覚量が大きいといえる。

2 種類の透明性錯覚は，行為者がその心的経験を他者から隠そうとしているのか，積極的に他者に伝えようとしているのかに関わらず，広く見られる（e.g., 工藤 , 2007; 武田 , 2005; 武田・沼崎 , 2007a, 2009）。また，親密な関係や同じ集団に属する（同性であるなど）関係においては，そうでない関係よりも透明性錯覚量が大きくなることが示されている（武田・沼崎 , 2007a, 2007b）。この理由は少なくとも 3 つ考えられる（武田・宇賀神・内田・松田 , 2006）。1 つは期待や信念である。特に親密な関係の場合，親密な関係なのだからお互いのことはよくわかるはず，わかるべきであるといった信念や期待があるために推測値が高くなりやすく，結果的に実際値との差（透明性錯覚量）が大きくなる。2 つめは自他の表象の重なりである。社会的絆のある関係では，自分と相手をひとまとめにして「うち」と呼ぶなど，自分と相手の表象の区別が曖昧になってくる（Aron, Aron, Tudor, & Nelson, 1991）。すると相手の心的経験を推測する際に，基点とした自分の心的経験との区別があまりされなくなり，調整が不充分でも正しく推測ができているとみなされやすくなる（Vorauer & Cameron, 2002）。3 つめは共通基盤の過大視である。他者の心を推測する際にはお互いに了解している内容や共有している情報，すなわち共通基盤を考慮する（Clark & Carlson, 1981）。親密な関係のようにお互いよく知っている関係や，多くの情報や経験を共有している関係においては共通基盤が大きいため，相手の心を推測する際に，共通基盤となっている何がしかの情報が役に立って正しく相手の心を把握できるだろうと推測しやすくなる（Van Boven, Kruger, Savitsky, & Gilovich, 2000）。

非対称な関係における透明性錯覚

これまでの透明性錯覚研究のほとんどは，大学生とその友人，恋人，未知他者（同じく学生）といった，明確な世代差や社会的立場の違いのない，対等な関係を対象として行なわれている。勝谷・亀山・坂本（2008）は学生ではなく成人夫婦を対象として透明性錯覚を検討し，2 種類の透明性錯覚が生じることを見いだしたが，夫婦は子どもの父親・母親として周囲から期待される役割は異なる可能性があるものの，夫婦内では友人や恋人と同様に対等な関係としてお互いを認識していると考えられる。Garcia（2002）は大学生参加者のペアを上司役と部下役に割り振って非対称な権力関係における行為者の透明性錯覚を検討し，権力の小さい方が行為者の透明性錯覚量が小さいことを見いだしたが，立場の非対称性は実験上の役割でし

かない。また，観察者の透明性錯覚は検討されていない。

日常生活の中では世代や社会的立場の異なる他者とコミュニケーションする機会が非常に多い。上司と部下，先輩と後輩，店員と客，教員と学生，親と子など，社会的立場の異なる関係において透明性錯覚が生じると，友人や知人との間で透明性錯覚が生じた場合よりも深刻なミス・コミュニケーションを引き起こす可能性がある。そこで本研究では，世代や社会的立場の異なる非対称な関係の１つである親子関係，具体的には女子大学生と母親を対象として，２種類の透明性錯覚を検討する。

青年期は心理的離乳の時期と呼ばれ，親子関係が転換する。子どもの成長に伴って，親が子を抱え込み守る関係から，親が子と手を切り，困ったときには支援をするが心理的距離は大きく取るような関係を経て，成人期へ移行する頃には親が子を頼りにすることもあるような対等な関係になる（落合・佐藤 , 1996）。大学生の多くは青年期後期に相当する年代である。この時期は自我の確立が重要な課題であるため，同性の友人を理想化や同一視の対象とする一方，親との心理的距離は遠くなり，対立や反発も生じる。ただし，母娘関係はこの時期でも，ほかの親子関係に比べて親密で心理的距離が近いことが指摘されており,「一卵性母娘」「友達母娘」などの表現も用いられている（e.g., 藤田・岡本 , 2009; 水本・山根 , 2010）。この理由としては，主に母親の側からの説明がなされている（e.g., 柏木・永久 1999; 高木・柏木 , 2000）。母親の娘に対する期待は息子に対するものとは異なり，自分の理解者であってほしい，娘の人生に介入したい，将来世話をしてほしいなどの期待を強く持つ。また，きょうだいの少なさが親子の直接的な結びつけを強め，娘との一体感への期待をもたらしている。

このような母娘関係において，透明性錯覚は見られるであろうか。母親が娘の心的経験を理解することと娘が母の心的経験を理解することは，世代や社会的立場の違いがあるためさまざまな点で異なると考えられる。従って本研究では娘を行為者，母親を観察者とし，母親が娘の心的経験を理解する状況における透明性錯覚を検討する。

世代が異なれば価値観，関心やライフスタイルは大きく異なる。こうした相違はジェネレーション・ギャップとしてよくも悪くも広く認識されているため，世代の異なる未知他者であれば「何を考えているか全くわからない」と感じ，他者の心的経験を推測する際に自分の心的経験を基点にすることが少ないかもしれない。しかし母娘関係においては一部の価値観や常識は養育の過程で世代間伝達がなされているはずであり，母親が娘の心的経験を理解しようとする際に自分の心を基点に考えることは妥当だと感じられるであろう。また，母親は娘を育てる過程で娘の要求や関心などに注目してきているはずである上，自分自身も娘時代を経験している。以上のことから，娘は母親に自分の心を理解されていると思いやすく，母親は娘の心を理解していると推測しやすいと考えられる。しかし母親と娘は別の人間であるため，自分の視点を基点とすると相手の視点まで充分な調節をすることができず，母娘関係においても２種類の透明性錯覚が見られると予測される。

関係の親密さと透明性錯覚量の関連については，先行研究と同じく親密である方が錯覚量は大きくなると予測する。ただし，母娘間の親密さの指標は，友人間の親密さを測定する場合のように一緒に活動する時間の長さや表象の重なりを直感的に回答する測度では適切に捉えるこ

とができないと思われる。そこで本研究では親密さに相当するものとして，親子相互の相手に対する信頼感を用いる。子の親に対する信頼感は幼児期の愛着と関連し，親との緊密さを反映するものと考えられる（酒井・菅原，眞榮城・菅原・北村 , 2002）。

母娘関係に影響を及ぼす要因の１つとして，きょうだい構成および出生順についても検討する。子どもが娘１人であれば母親はこの娘１人と濃密な関係を築こうとするであろうが，ほかのきょうだいがいる場合は母娘間の心理的距離は縮みにくいと考えられる。また出生順により親の養育態度が違い，娘の母親に対する態度（たとえば感謝の気持ちを抱いているか；倉岡・平田 , 2010）に違いが見られることなどが指摘されている。

本研究の目的と仮説

以上より，本研究の目的は次の２点である。1. 母（観察者）- 娘（行為者）関係を対象として，２種類の透明性錯覚が見られるか検討する。2. 母娘間の関係性（お互いに対する信頼感）や娘のきょうだい構成によって透明性錯覚量に違いが見られるか検討する。

上記目的に対応する仮説は以下の通りである。1a. 娘は自分の心的経験が母親に理解されている程度を過大推定するであろう。すなわち，行為者の透明性錯覚が生じるであろう。1b. 母親は娘の心的経験を理解している程度を過大推定するであろう。すなわち，観察者の透明性錯覚が生じるであろう。2a. 娘の（母親に対する）信頼感が高いほど，行為者の透明性錯覚量は大きいであろう。2b. 母親の（娘に対する）信頼感が高いほど，観察者の透明性錯覚量は大きいであろう。なお，娘のきょうだい構成については具体的な仮説を設けず，探索的に検討する。

方　法

調査回答者

都内の女子短期大学生とその母親 50 組を対象として調査依頼を行ない，学生 21 名分（年齢 M=19.40, SD=0.82）および母親 26 名分（年齢 M=48.30, SD=3.85）の回答が得られた。このうち母娘両者の回答が不備なく得られた 20 組分のデータを分析対象とした。

質問紙の構成

娘用と母親用の２種類の質問紙を作成した。

娘用質問紙は A. 自己評定，B. 行為者推測，C. 信頼感の３部構成であった。A では，女子大学生が「母親がそれをわかっているかどうか」を想像することが自然にありそうな心的経験を 16 項目挙げ（「私は同性に好かれる性格だ」「私はお母さんに何でも話す」など），５件法（1. 当てはまらない～ 5. 当てはまる）で自己評定させた。B では，母親用質問紙においてＡ自己評定値を母親に予想させていることを説明し，母親が各項目の自己評定値を当てられるかどうかを推測させ，（当てられると）「思う」「思わない」の２件法で回答させた。C については，酒井ら（2002）を改訂した親子間の信頼感に関する尺度（堀 , 2007）の子ども用項

目 8 項目に，4 件法（1. 当てはまらない～ 4. 当てはまる）で回答させた。最後に年齢と兄弟姉妹の人数を尋ねた。

母親用質問紙は，a. 娘の自己評定値予想，b. 観察者推測，c. 信頼感の 3 部構成であった。a では娘用質問紙の A と同じ 16 項目を提示し，娘用質問紙で娘に自己評定させていることを説明して，娘の自己評定を予想させた。b では a で自分が行なった各項目の予想が当たっているかどうかを推測させ，（当たっていると）「思う」「思わない」の 2 件法で回答させた。c については，親子間の信頼感に関する尺度の親版 8 項目に 4 件法で回答させた。最後に年齢を尋ねた。

手続き

調査は 2011 年 11 月に実施した。現在母親と同居している学生を対象に，娘用質問紙，母親用質問紙，依頼書各 1 部と，返信用封筒 2 通および謝礼（大学ロゴ入りペン 2 本）をセットにして渡した。依頼書上および学生に対し口頭で，学生と母親がそれぞれの質問紙に別々に回答の上，約 2 週間後を期限として別々に返信するよう依頼した（依頼書には，期限を過ぎても返信されたものは受け取る旨を記載した）。

質問紙には通し番号をふっておき，これにより別々に返信されてきた質問紙をマッチングした。

結　果

2 種類の透明性錯覚

質問紙の構成 B で娘が自己評定値を母親に当てられると「思う」と回答した項目数を行為者推測値とした。同様に，質問紙の構成 b で母親が娘の自己評定値を当てることができたと「思う」と回答した項目数を観察者推測値とした。質問紙の構成 A と a の回答を母娘間で照合し，母親が実際に娘の自己評定値を正しく予想できていた項目数を実際値とし，これらを透明性指標とした（図 1）。

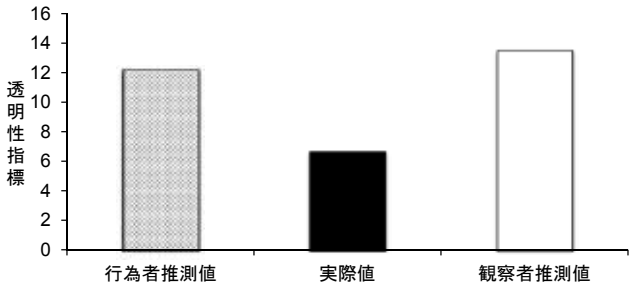


図1 透明性指標の平均値

透明性指標に対して繰り返しのある 1 要因分散分析を行ったところ，指標の効果が有意であった（$F_{(2,38)}$=67.15, p<.001）。行為者推測値も観察者推測値も，実際値より有意に大きかった（行為者推測値 M=12.25, SD=2.24; 観察者推測値 M=13.55, SD=2.65; 実際値 M=6.70, SD=2.00）。仮説 1a，1b はどちらも支持された。

母娘間の信頼感と透明性指標および錯覚量の関連

質問紙の構成 C および c の評定値をそれぞれ合計し，これをお互いに対する信頼感とした

（娘 *M*=26.60, *SD*=2.53; 母親 *M*=26.78, *SD*=2.51）。行為者推測値および観察者推測値から実際値を引いたものをそれぞれ行為者錯覚量および観察者錯覚量とした。

3つの透明性指標と2つの錯覚量，および娘と母親それぞれの信頼感の相関係数を算出した（表1）。その結果，行為者推測値は観察者推測値および実際値との間に中程度の正の相関

表1 透明性指標，錯覚量，信頼感および年上・下きょうだい数の相関係数

	行為者推測値	観察者推測値	実際値	行為者錯覚量	観察者錯覚量	娘の信頼感	母親の信頼感	年上きょうだい数
観察者推測値	0.39							
実際値	0.36	0.06						
行為者錯覚量	0.63	0.31	−0.50					
観察者錯覚量	0.10	0.78	−0.57	0.57				
娘の信頼感	0.05	−0.23	0.18	−0.11	−0.30			
母親の信頼感	−0.10	−0.06	−0.08	−0.03	0.01	0.11		
年上きょうだい数	−0.48	−0.18	−0.13	−0.34	−0.07	−0.20	0.46	
年下きょうだい数	0.24	0.35	−0.19	0.38	0.40	−0.30	0.11	−0.14

が見られたが（それぞれ *r*=.39; *r*=.36），観察者推測値と実際値はほぼ無相関であった（r=.06）。娘が自分の心的経験を母親に理解されていると推測しているほど，母親も娘の心的経験を理解していると推測しており，実際にも理解していた。ただし母親が娘の心的経験を理解していると推測している程度と実際に理解している程度の間には関連がなかった。

信頼感と透明性指標の関係を見ると，娘の母親に対する信頼感と行為者推測値および実際値の間には相関がほとんど見られなかった。観察者推測値との間には弱い負の相関が見られ（*r*=−.23），母親が娘の心的経験を理解していると推測しているほど娘の母に対する信頼感は低いというパタンであった。母親の娘に対する信頼感と3つの透明性指標の間にはほとんど相関が見られなかった。

信頼感と2つの錯覚量の相関を見ると，娘の信頼感は行為者錯覚量とはほとんど相関が見られなかったが，観察者錯覚量との間には中程度の負の相関が見られ（r=−.30），娘が母親を信頼しているほど観察者錯覚量は小さいというパタンであった。母親の信頼感はどちらの錯覚量との間にもほとんど相関は見られなかった。仮説 2a，2b はどちらも支持されなかった。

きょうだい関係と透明性指標，錯覚量および母娘間の信頼感の関連

娘のきょうだい数は0～3人であり，年上のきょうだい数と年下のきょうだい数はそれぞれ0～2人であった[4)]。出生順別に見ると，長子7名，中間子4名，末子5名，一人子4名であった。3つの透明性指標，2つの錯覚量および母親と娘それぞれの信頼感はいずれも，出生順による違いは見られなかった（表2）。

年上きょうだい数および年下きょうだい数と透明性指標，錯覚量および信頼感の相関係数を算出したところ（表1），年上きょうだい数は行為者推測値および行為者錯覚量との間に中程度の負の相関が見られ（それぞれ *r*=−.48; *r*=−.34），母親の信頼感との間には中程度の正の相関

表2 娘の出生順別に見た透明性指標，錯覚量および信頼感の平均値（標準偏差）

	N	行為者推測値	観察者推測値	実際値	行為者錯覚量	観察者錯覚量	娘の信頼感	母親の信頼感
長子	7	13.29 (1.80)	15.00 (1.92)	6.71 (1.89)	6.57 (2.07)	8.29 (2.29)	26.71 (4.96)	26.07 (2.24)
中間子	4	11.75 (2.99)	13.50 (1.92)	6.50 (2.89)	5.25 (3.30)	7.00 (4.69)	25.00 (2.58)	29.00 (1.16)
末子	5	11.00 (2.00)	12.20 (3.42)	7.00 (1.00)	4.00 (2.35)	5.20 (3.56)	26.80 (3.11)	27.00 (1.73)
一人子	4	12.50 (2.38)	12.75 (2.99)	6.50 (2.89)	6.00 (1.83)	6.25 (2.50)	27.75 (2.22)	25.50 (3.79)

が見られた（r=.46）。つまり，年上きょうだいが多い娘ほど，娘は自分の心的経験は母親に理解されていないであろうと推測しており，行為者錯覚量も小さかった。一方母親は娘より年上のきょうだいが多いほど，娘に対して高い信頼感を持つ傾向があった。

年下きょうだい数は，行為者推測値との間に弱い正の相関（r=.24），観察者推測値との間に中程度の正の相関（r=.35）が見られた。錯覚量との関係を見ても，年下きょうだい数は2つの錯覚量それぞれとの間に中程度の正の相関が見られた（行為者錯覚量との相関 r=.38; 観察者錯覚量との相関 r=.40）。また，娘の信頼感との間には中程度の負の相関（r=−.30）が見られた。年下きょうだいが多いほど，2つの錯覚量は共に大きく，娘の信頼感は低くなっていた。

考　察

本研究では，母娘関係を対象に，母親が娘の心的経験を理解している程度を過大に見積もる傾向が見られるかを検討した。娘の側からは自分の心的経験が母親に理解されていると過大推定する行為者の透明性錯覚，母親の側からは自分は娘の心的状態を理解していると過大推定する観察者の透明性錯覚を検討し，その錯覚量が母娘相互の信頼感や娘のきょうだい構成によって異なるかも合わせて検討した。

親子という異世代関係においても，2種類の透明性錯覚が見られた。大学生の娘は母親が自分のことを理解していると過大評価しており，行為者の透明性錯覚が生じていた。一方，母親は自分が娘のことを理解していると過大評価しており，観察者の透明性錯覚が生じていた。実際値は全体の半分よりやや少ない6.7項目であったが，この値はチャンスレベルである3.2よりも高いため，母親は確かにある程度娘のことを理解しているといえる。本研究では娘の心的経験を母親が理解するという行為者 - 観察者関係を扱ったが，親が子を理解しようとするという状況は社会的役割に合致しているために推測値が高くなりやすかった可能性がある。同じ母娘間でも行為者 - 観察者関係を逆転させた場合，すなわち母親の心的経験を娘が理解しようとする場合でも同様に透明性錯覚が生じるかは本研究から明確にはできない。心理的離乳を経て親子が対等の関係になっているかどうかによって，透明性錯覚量に違いが見られるかもしれない。また，親が子の心を理解するという社会的役割に合致した状況でも，心理的距離が近いとされる母娘以外の関係（母と息子，父と娘，父と息子）では透明性錯覚が生起するかどうか，生起するとしても錯覚量に違いが見られるかもしれない。従って，本研究の結果をもって異なる世代間でも透明性錯覚が頑健に見られると結論づけるのは早計であろう。

信頼感と透明性錯覚量の間には，明確な関連は見られなかった。錯覚量でなく推測値で見た場合でも，信頼感の高さと行為者推測値および観察者推測値のいずれの間にも相関は見られなかった。ただしこの結果は，今回の回答者の信頼感が一様に高かったために得られた可能性がある。4 ～ 32 点の幅を持つ信頼感尺度において，母娘ともに平均値は 26 ～ 27 点であった。本研究の実施方法は娘を通じて母親にも回答を依頼するというものであった。そのため，母親との関係が悪ければ娘が母親に調査依頼を伝えにくいであろう。本研究のデータは，母娘両者が揃って回答をきちんと返送してくれるような，良好な母娘関係のものに偏っていると考えられる。娘の信頼感と母親の観察者推測値の間に見られた弱い負の相関は，母親が安易に娘のことを理解していると思わない方が，娘の信頼を得やすいことを示しているのかもしれない。

きょうだい関係と透明性錯覚の関係については，いくつかの相関関係が見いだされた。年上きょうだいが多いほど娘は自分の心的経験を母親に理解されていると思いにくく，行為者錯覚量も小さくなる傾向が見られた。一方，年下きょうだいが多いほど 2 種類の透明性錯覚量はどちらも大きくなる傾向が見られた。年上きょうだいが多いことは出生順が遅いことと関連し，年下きょうだいが多いことは出生順が早いことと関連する。出生順が早ければ親は子の養育に力を入れ，母親自身も娘も，母親は娘のことを理解していると感じやすくなるのかもしれない。逆に出生順が後になるほど親は手をかけず，親はそのようなつもりがなくても，子どもの側からすると理解されていると感じにくくなるのかもしれない。ただし末子の場合はむしろ手をかけられる傾向があるので（浜崎・依田 , 1985; 倉岡・平田 , 2010），きょうだい数と透明性錯覚量の関連を親の養育態度で説明することは妥当でない可能性がある。

本研究のまとめと今後の展望

母娘間の透明性錯覚，相互の信頼感および娘のきょうだい構成の関連についていくつかの結果が得られたが，本研究のデータは相互に高い信頼感を持つ回答者のものに偏っている可能性があるので，母娘関係と透明性錯覚の関連については今後データ収集のしかたを改善して再度検討する必要がある。また，本研究ではきょうだいの性別や年齢差を考慮せず，年上･年下きょうだいの人数と出生順の観点からのみ透明性錯覚との関連を検討したが，充分な数のデータを集めても本研究の結果が再現されるかを確認すべきであろう。

本研究では非対称な関係として母娘関係を対象としたが，透明性錯覚や自己中心性バイアスのメカニズムに関する知見の蓄積のためには，母娘以外の親子関係，さらに親子以外の非対称な関係を対象とした検討を行なうことが必要である。

引用文献

Aron, A., Aron. E. N., Tudor, M., & Nelson, G. (1991). Close relationships as including other in the self. *Journal of Personality and Social Psychology,* **60**, 241-253.

Clark, H. H., & Carlson, T. B. (1981). Context for comprehension. In J. Long & A. Baddeley (Eds.), *Attention and performance IX* (Pp. 313-330). Hillsdale, NJ: LEA.

Epley, N., Keysar, B., Van Boven, L., & Gilovich, T. (2004). Perspective taking as egocentric anchoring and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology,* **87**, 327-339.

藤田ミナ・岡本祐子（2009）．青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要，**8**，121-132.

Garcia, S. M. (2002) Power and the illusion of transparency in negotiations. *Journal of Business and Psychology,* **17**, 133-144.

Gilovich, T., Kruger, J., & Savitsky, K. (1999). Everyday egocentrism and everyday interpersonal problems. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems* (Pp.69-95). Washington D.C.: APA.

（T. ギロビッチ・J. クルーガー・K. サビツキー（2001）.日常生活の中の自己中心性と対人的問題 R. M. コワルスキ・M. R. リアリー（著）安藤清志・丹野義彦（監訳）臨床社会心理学の進歩 北大路書房 Pp.72-105.）

Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology,* **75**, 332-346.

浜崎信行・依田明（1985）．出生順位と性格（2）：3 人きょうだいの場合 横浜国立大学紀要，**25**, 187-196.

堀洋道（監修）（2007）．心理測定尺度集 IV サイエンス社

鎌田晶子・堀洋元・伊藤洋次・吉野大輔（1999）.「透明性の錯覚」: 行為者と観察者相互の視点から 第 40 回日本社会心理学会大会論文集，224-225.

柏木惠子・永久ひさ子（1999）. 女性における子どもの価値――今，なぜ子を産むか―― 教育心理学研究，**47**, 170-179.

勝谷紀子・亀山晶子・坂本真士（2008）．育児ストレス時における認知および対処行動，抑うつの関連（1）――育児ストレスの経験において透明性の錯覚はみられるか――日本心理学会第 72 回大会発表論文集，240.

工藤恵理子（2007）．親密な関係におけるメタ認知バイアス――友人間の透明性の錯覚における社会的規範仮説の検討――実験社会心理学研究，**46**, 63-77.

倉岡理保・平田裕美（2010）．青年期の子どもの出生順位と母親への感謝，および対人行動との関連――大学生女子を対象として―― 女子栄養大学紀要，**41**, 89-94.

水本深喜・山根律子（2010）．青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究，**21**, 254-265.

Nickerson, R. S. (1999). How we know -and sometimes misjudge- what others know: Imputing one's own knowledge to others. *Psychological Bulletin,* **125**, 737-759.

落合良行・佐藤有耕（1996）．親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究，**44**, 11-22.

岡本真一郎（編）（2011）．ミス・コミュニケーション ナカニシヤ出版

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則（2002）．中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究 , **50**, 12-22.

高木紀子・柏木惠子（2000）．母親と娘の関係――夫との関係を中心に―― 発達研究，**15**, 79-94.

武田美亜（2006）．相手との関係が 2 種類の透明性の錯覚に及ぼす効果：心的経験を隠す場面を用いた検討 東京都立大学心理学研究，**16**, 11-19.

武田美亜・沼崎誠（2007a）．相手との親密さが心的経験の積極的伝達場面における 2 種類の透明性の錯覚に及ぼす効果　社会心理学研究，**23**, 57-70.

武田美亜・沼崎誠（2007b）．共通基盤の想定が透明性の錯覚に及ぼす効果　対人社会心理学研究，**7**, 11-19.

武田美亜・沼崎誠（2009）．共通基盤知覚がさまざまな心的経験の透明性の錯覚に及ぼす影響 対人社会心理学研究，**9**, 55-62.

Van Boven, L., Kruger, J., Savitsky, K., & Gilovich, T. (2000). When social worlds collide: Overconfidence in

the multiple audience problem. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **26**, 619-628.
Vorauer, J. D., & Ross, M. (1999). Self-awareness and feeling transparent: Failing to suppress one's self. Journal of *Experimental Social Psychology,* **35**, 415-440.

注

1）本研究は磯前陽子さん（平成 23 年度青山学院女子短期大学卒業生）が著者の指導の下行なった卒業研究のデータを再分析したものである。
2）本研究の一部は，日本社会心理学会第 53 回大会（2012 年 11 月，於筑波大学）にて発表された。
3）対人コミュニケーションは基本的には双方向的なものであり，お互いに行為者でも観察者でもあるが，相互作用のある一面を切り取って便宜的に一方を行為者，他方を観察者とする。これら 2 つの立場について，（メッセージの）送り手・受け手などの表現を用いる場合もあるが，透明性錯覚は行為者が特に何らかのメッセージを送ろうとしない状況でも見られるものであるため，本稿では広範な状況に使える表現として行為者・観察者の語を用いる。
4）調査では兄弟姉妹それぞれの人数を尋ねたが，データ数が少なく分析に耐えないため，本研究ではきょうだいの性別を分析に含めなかった。

Illusion of Transparency Among Mother-daughter Relationships

TAKEDA Mia

This study examined 2 types of illusion of transparency (IoT) among mother-daughter relationships. Twenty female college students rated 16 items and they inferred whether their mother could tell their ratings or not. The students' mothers guessed their daughter's ratings and inferred whether their guesses would be correct or not. Students overestimated the extent that their inner state was understood by their mother (actor's IoT). Mothers overestimated the extent to they could understand their daughter's inner state (observer's IoT). Although the magnitude of the 2 types of IoT were not correlated with mutual trust between mother and daughter, this may be because the students and their mothers who participated in this study all have high trust in each other. The number of older siblings negatively correlated with the actor's IoT. The Number of younger siblings positively correlated with the actor's and observer's IoT. Relationships between the 2 types of IoT, mother-daughter relationships, and birth order are discussed.

Keywords : Mother-daughter relationships, Actor's illusion of transparency, Observer's illusion of transparency, Trust, Siblings